The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	明初における東西の仏教交流と青海チベット仏教寺院：永楽帝の対外政策における瞿曇寺「御製金仏像碑」の役割
Author(s)	伴，真一朗
Citation	内陸アジア言語の研究. 2009, 24, p. 173-206
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/15570
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

明初における東西の仏教交流と青海チベット仏教寺院
——永楽帝の対外政策における瞿曇寺「御製金仏像碑」の役割——

伴　真一朗

はじめに

青海省の省都西寧の65 km程東に位置する楽都県に漢名を瞿曇寺，チベット名をトツァン・ゴンパ（Tib. gro tshang dgon pa）というチベット仏教寺院が現存する[(1)]．この寺院がチベット仏教寺院にもかかわらず瞿曇寺という漢名を持つのは，この寺院の建立者であるチベット人僧侶三羅喇嘛が洪武26年（1393）に寺名を洪武帝から下賜され，明朝（1368-1644）との間に密接な関係が作られたからである[(2)]．その歴史を示すかのように，寺院内には永楽（1403-1424）～宣徳

(1)　瞿曇寺は現青海省楽都県瞿曇鎮にある．この寺院については，シュラムが言及している［Schram 1957: 21-24］ほか，乙坂が青海におけるカルマ派の著名寺院と述べ［乙坂 1991: 53, 57］，才譲が明代の湟水における最大規模の寺院としている［才譲 2007: 14］．同寺の歴史や現状については，謝［1998］がまとめている．なおチベット語史料『テプテルギャムツォ（*deb ther rgya mtsho*）』には同寺の歴史について述べられている箇所がある［Part I: ff. 201b-210b2］．同書は成立年代が同治4年（1865）と時代が降るため，それ以前に成立した『明實録』や注（3）で述べる碑刻史料に比べて史料的価値は劣るが，興味深い記述が多い．その検討は今後の課題としたい．

(2)　謝［1998: 11-16］によれば，本寺は洪武25年（1392）前後に中央チベットのロダク（Tib. lho brag）出身であるカルマ派の僧サンゲタシー（Tib. sangs rgyas bkra shis）によって建立され，同年に彼が罕東衛の諸部を率いて明朝に帰順した功績により勅額と瞿曇寺という寺名を下賜されたという．つまり明朝史料中にある瞿曇寺の僧侶三羅喇嘛をサンゲタシーとするのである．しかし，『テプテルギャムツォ』には，サムテンロトー（Tib. bsam bstan blo gros）という人物がサンゲタシーの後継者とされている［Part I: f. 203b1］．三羅は，このサムテンロトーの名前を省略したサムロー（Tib. bsam blo）の音写である可能性もある．

(1426-1435) 間にかけての歴代明朝皇帝から下賜された勅額や漢文・チベット文合璧の勅諭碑が残されている．特に永楽朝における勅諭碑が多い.[3]

さて，明朝のほぼ全時期において，儒教理念による解釈では番僧による来朝と明朝による法位及び財物の下賜，チベット仏教理念による解釈では明朝によるチベット仏教僧の招請と財物の布施が盛んに行なわれた [Wylie 1979, 佐藤 1986: 3 章・4 章・6 章・7 章，乙坂 1998, 陳 2000, 沈 2007]．明朝とチベットとの関係は密接だったといえるのである．

この明朝・チベット関係史において，両者の境界にある青海・甘粛・四川のチベット仏教寺院やチベット系部族の役割が注目されつつある．例えば青海の弘化寺，甘粛の演教寺や河氏，四川の霊蔵 (Tib. gling tshang) 王家である．これらの勢力が漢地とチベット双方の文化や状況に通じた自らの特性を生かし，明朝と中央チベットの諸勢力との交渉に仲介役としての役割を果たしたことが明らかにされている.[4]

---

(3) 瞿曇寺に残存している明代の碑刻史料は永楽 6 年 (1408)「皇帝勅諭碑」，永楽 16 年 (1418)「皇帝勅諭碑」，永楽 16 年 (1418)「御製金仏像碑」，洪熙元年 (1425)「御製瞿曇寺碑」，宣徳 2 年 (1427)「御製瞿曇寺後殿碑」である．陳・馬 [1990: 1-65]，謝・格・袁 [1993: 77-85] に漢文面の録文が，謝 [1998: 87-105] に漢文面とチベット文面の録文が，陳・馬 [1990: 口絵, 1-65] に漢文面とチベット文面の写真と録文が収録されている．しかし，陳・馬 [1990: 口絵] の写真は不鮮明で判読できない箇所が多い．謝・格・袁 [1993: 口絵] に収録されている写真は鮮明であるが，永楽 16 年 (1418)「御製金仏像碑」の漢文面のみである．また順治『西寧志』(不分巻) には永楽 16 年 (1418)「御製金仏像碑」と洪熙元年 (1425)「御製瞿曇寺碑」の録文があり，これは筆者が確認できた限りでは最古の録文である．前者の録文は，30 葉裏～ 31 葉裏にあるが，録文の前半部分が宣徳 2 年 (1427)「御製瞿曇寺後殿碑」のそれと混在している不完全なものである．また後者の録文は同 28 葉表～ 29 葉裏にある．筆者は 2004 年 9 月に同寺を訪問し，これらの碑文を実見した．しかし，永楽 6 年 (1408)「皇帝勅諭碑」だけは実見できなかった．この時の調査に基づいた永楽 16 年 (1418)「皇帝勅諭碑」の史料的価値の検討と和訳を伴 [2005] において行なった．

(4) 弘化寺については乙坂 [1991]，Otosaka [1994] が，演教寺については乙坂 [2002] が，河氏については Sperling [1990b] が，霊蔵王家については Sperling [1990a] と沈 [2003] が，その役割を論じている．

このような近年の研究成果から考えるならば，冒頭にあげた瞿曇寺は，中国・チベットの境界地帯である青海に位置し，かつ明皇帝の勅諭碑が残されていることから，明朝のチベット政策において重要な役割を演じたことが推測できる．しかし，従来の同寺に関する先行研究においては明朝との関係の密接さが指摘されているのみで［謝 1998: 25-32，才譲 2007: 14-15］，明朝の対外政策における役割などについては検討されていない．

ここで瞿曇寺に残されている勅諭碑に永楽朝のものが多いことに注目したい．永楽朝は明朝のチベット政策において重要な時期である．この時期にカルマ派，パクモドゥ派，ディグン派，サキャ派等の主要なチベット仏教宗派の高僧への法王号の交付が行なわれ，後の明朝のチベット政策を規定した［佐藤 1986: 173］．これらの政策がチベットに対する政治的支配を強めるものだったのかどうかには議論があるが，(5) 積極的なチベット政策が行なわれたことは疑いがないだろう．そして，永楽朝においてはチベット政策のみならず，モンゴル遠征，ベトナム遠征に代表されるように，大元ウルスを継承しようとする対外政策が行なわれた［宮崎 1992: 56-61，壇上 1997: 196-217］．このような背景を考えると，永楽朝の瞿曇寺への政策は単にチベットだけではなく，より広い地域を視野に入れていたのではないだろうか．

では永楽朝の対外政策において瞿曇寺はどのような役割を果たしたのか．本稿では瞿曇寺に残っている永楽 16 年（1418）「御製金仏像碑」（以下「御製金仏像碑」とする）についての検討を行ない，永楽帝が西方の仏教文化圏に対して自己の仏教功徳を示す際に，その拠点としての役割を瞿曇寺が果たしたことを明らかにしたい．

本稿において重要な史料である「御製金仏像碑」については，既に謝・格・袁［1993: 81］，謝［1998: 39-40］，陳・馬［1990: 28-29］に解題があり，陳・馬［1990: 36-42］に漢文面とチベット文面の注釈がある．しかし，文面の形式等を

(5) Sperling［1993］では明朝によるチベット政策は，政治的支配よりも交易関係の確立を行なおうとしたものであると論じられている．

他の史料と比較対照してその史料的価値を検討したものではない．本稿ではまた「御製金仏像碑」の文面の形式等を『寶藏』や『西藏歴史檔案薈粹』に収録されている明朝の漢文・チベット文合璧文書と対照することにより，初歩的な文献学的考察も行ないたい．

第１章　「御製金仏像碑」の録文と和訳

碑文の校訂にあたっては，謝・格・袁[1993: 80-82]，陳・馬[1990: 30-35]，謝［1998: 92-95］にある録文を参考にした．注釈については陳・馬［1990: 36-42]にあるが，記述の根拠を示さない簡略なものであり，それを補うために本稿においても注を付したい．

（１）漢文面移録

筆者の撮影した写真は三つに分かれているので，本稿では一枚にまとまった写真である謝・格・袁［1993: 口絵］を使用した．**Plate XIV** 参照．

[碑首] 御製金佛像碑

[1] 御製金佛像碑 [2] 如来千百億化身慈悲萬有閔濟三塗作大方便善哉善哉總攝羣生咸登覺道為苦海之舟梁幽冥之 [3] 日月有能作佛功德普利一切則三界人天皆所敬仰香雲彌布法雨充周大地山河皆為佛國含靈蠢 [4] 動悉得濟度朕主宰天下愍念蒼生弘體慈悲發歡喜心鑄金為佛像利益羣品初命工作範久而不成 [5] 一日工匠退食闃然無人模忽自成莫不驚異賛歎以為希有謂諸佛菩薩顯應示現神通遂一鑄而成 [6] 乃有異香馥郁久而不散非人間所有瑞光圓滿毫相瑞嚴具諸種好是為最妙吉祥持以布施灌頂淨 [7] 覺弘濟大國師班丹蔵卜歸于西土濟利羣生作無量勝果増長無量福德俾時和歳豐家給人足老少 [8] 康寧災殃殄滅吉祥如意永蒙 [9] 佛〔1 字擡頭〕恩於乎佛體如如真常寂靜故無感不應昔優填王作旃檀佛像妙感忉利天匠殊勝特異利益一切靡 [10] 有窮極朕今用金鑄像而感應復若此所以利益者亦復如是用紀其事勒之于石永隆 [11] 佛〔1 字擡頭〕

教久遠益盛乃為賛曰 [12]〔3 字空白〕道徳巍巍兩足尊〔2 字空白〕超出三界甚希有〔2 字空白〕廣與衆生作方便〔2 字空白〕能以一善攝一切 [13]〔3 字空白〕有縁遇者即超悟〔2 字空白〕不動瞬際證圓融〔2 字空白〕我今作此勝妙像〔2 字空白〕毫相端嚴無比好 [14]〔3 字空白〕普利三塗與六道〔2 字空白〕蠢蠕胎濕悉蒙恩〔2 字空白〕永願世間諸有情〔2 字空白〕不纏煩悩咸快樂 [15]〔3 字空白〕五濁惡世悉清淨〔2 字空白〕即證如来寶覺中〔2 字空白〕大慈大悲現法身〔2 字空白〕金剛堅固無有壞 [16]〔3 字空白〕不可思議大劫海〔2 字空白〕一切歸命法中王 [17] 永樂十六年三月初一日

【注】

***l.* 6** 持：碑文では「持」．謝・格・袁 [1993: 80]，陳・馬 [1990: 31]，謝 [1998: 92] の移録ではそのまま「持」とするが，「特」であろう．この部分はチベット文面では nan gyis としている [16 行]．明朝の漢・チベット合璧檔案である「永楽皇帝頒給昝肖的勅諭」[永楽 11 年 (1413) 2 月初 9 日，『西藏歴史檔案薈粹』No. 25] にある，チベット文の da lta nan gyis khyod la si thu'i ming dang las dka' bskos nas を漢文では「茲に特に爾に授けて司徒と為す(茲特授爾為司徒)」としているからである．チベット文の da lta が漢文の「茲」，チベット文の nan gyis が漢文の「特」，チベット文の khyod が漢文の「爾」にそれぞれ対応している．nan gyis について，Goldstein [2001: 611] では「emphatically, 強調して」という意味を付すが，それが漢文の「特」に通じていると考えられる．

(2) 漢文面読み下し

[碑首] 御製金佛像碑.

[1] 御製金佛像碑. [2] 如来は千百億の化身もて，萬有を慈悲し，三塗を閔み濟い，大方便を作す．善き哉，善き哉．羣生を總て攝り，咸な覺道に登らしむ

るに，苦海の舟梁，幽冥の [3] 日月と為り，能く佛たらしむるの功德有りて，普く一切を利すれば，則ち三界の人天の皆敬仰する所なり．香雲は彌布し，法雨は充周し，大地・山河は皆佛國と為り，含靈・蠢 [4] 動は悉く濟度を得る．朕は天下を主宰し，蒼生を愍み念い，弘く慈悲を體して，歡喜心を発し，金を鑄して佛像を為り，羣品を利益せんとす．初め工に命じて範を作らしむるも，久しくして成らず．[5] 一日，工匠が食に退きて，闃然として人無きに，模は忽ち自ら成る．驚異，賛歎せざるなく，以て希有と為す．謂えらく．諸佛菩薩が顯應し，神通を示現せりと．遂に一鑄して成れば，[6] 乃ち異香の馥郁たること有りて久しくして散らざるは，人間に有る所にあらず．瑞光は圓滿，毫相は瑞嚴にして，諸の種好を具えるは，是，最妙の吉祥為り．特に以って灌頂淨 [7] 覺弘濟大國師班丹蔵卜に布施し，西土に歸せしめば，羣生を濟利せしめ，無量の勝果を作らしめ，無量の福德を増長せしめ，時をして和ならしめ歳をして豐かならしめ，家に給せしめ人を足らしめ，老少は [8] 康寧し，災殃は殄滅し，吉祥は意の如くし，永く [9] 佛恩を蒙る．ああ，佛體の如如と，真常は寂靜たり．故に感じて應ぜざるは無し．昔，優填王が旃檀佛像を作るに，忉利天匠を妙感すること殊勝特異にして一切を利益するは，窮極ある [10] なし．朕は今，金をもって像を鑄するに，感應は復た此の若し．以って利益する所は亦た復た是の如し，其事を紀すをもって之を石に勒す．永く [11] 佛教を隆し，久遠まで益を盛んならしむ．乃ち賛を為りて曰く，[12] 道德の巍巍たる兩足尊は，三界を超出すること甚だ希有にして，廣く衆生に方便を作す．能く一善を以って一切 [13] を攝らば，縁遇ある者は即ち超悟し，不動にして瞬際に圓融を證す．我は今，此の勝妙の像を作る．毫相は端嚴なること好を比ぶる無し．[14] 普く三塗と六道とを利し，蠢蠕胎濕は悉く恩を蒙り，永に世間の諸有情を願い，煩悩を纏わずみな快樂たりて，[15] 五濁の惡世は悉く清淨たるを，即ち如来の寶覺中に證し，大慈大悲もて法身を現し，金剛堅固なること壞ある無し，[16] 不可思議なる大劫海にて，一切を法中の王に歸命せん．[17] 永樂十六年三月初一日．

【注】

***l.* 2, *l.* 14** 三塗：地獄，餓鬼，畜生の三悪趣のこと．三途ともいう．生あるものが自らの悪行の結果として，死後にたどる三種の苦しい世界のこと[中村・福永・田村・今野・末木 2002: 74／以下，中村・福永等 2002 とする]．

***l.* 3** 三界：衆生が住む世界の総称．欲界，色界，無色界からなる[中村・福永等 2002: 370]．

***l.* 9** 忉利天：三十三天ともいう．須弥山の頂上にあり，帝釈天が住む[中村・福永等 2002: 763]．

***l.* 12** 両足尊：仏の尊称の一つ [中村・福永等 2002: 1052]．

***l.* 14** 六道：衆生が業によって生死を繰り返す六つの世界．地獄，餓鬼，畜生，阿修羅，人，天の六つ [中村・福永等 2002: 1072]．

(3) チベット文面移録[6]

チベット文碑文の特殊記号の表記は，Tibetan & Himalayan Digital Library の Web ページ (2008 年 12 月 16 日確認／URL = http://www.thdl.org/) にある THDL Extended Wylie Transliteration Scheme (2008 年 12 月 16 日確認／URL = http://www.thdl.org/collections/langling/ewts/ewts.php) にしたがった．本稿では以下の記号を用いる．また巻頭の **Plate XV** は，2004 年 9 月に筆者が撮影した「御製金仏像碑」の複数の写真を合成したものである．

→ @　 → ¥uF039　 → ;　 → ~M`

[碑首] @@@ rgyal pos gser sku la bstod pa'i rdo ring ni/¥uF039/

[1] @@ rgyal pos mdzad pa'i sangs rgyas shākya thub pa rang byon gser sku la bstod pa rdo ring la bzhag pa [2] zhes bya ba ni; de bzhin gshegs pa'i sku brgya stong 'bum phrag du mar sprul pa; skye dgu rnams la byams snying [3] rje mdzad pa dang; ngan song gsum las rnam par 'dren pa; thabs rgya chen por

(6) チベット文の校訂・読解については大谷大学名誉教授白館戒雲氏の教示を得た．

gyur pa la shin du legs so; lags [4] so; 'dul ba'i gdul bya rnams sangs rgyas kyi lam la bkod cing; sdug bsngal rgya mtsho'i gru rdzing lta bu'am; mun pa'i gling [5] du nyi zla lta bu'o; gal te sangs rgyas kyi yon tan bsgrub pa dang; sems can thams cad la phan par byed pa yod na; khaMs [6] gsum gyi lha mi rnams kyis dad pa dang skyabs su 'gro bas; de dag gis dri zhim gyi spyin ni mkha' kyab du g·yo' shing; chos [7] kyi char pa kun du bab cing; de la brten nas sa chen dang ri mtsho thams cad sangs rgyas kyi zhing du gyur pa dang; 'gro ba [8] kun gyis phan pas thob pa yin no/~M` nged kyis rgyal khams thams cad kyi bdag por byas nas; sems can thams [9] cad la phan pa dang; byams dang snying rje rgya chen gyis dga' ba'i sems bskyed nas; gser gyis sangs rgyas kyi [10] sku gzugs blugs nas 'gro ba kun la phan par byed pa snyam nas; bzo ba rnams la lha gzugs bzor chug [11] pa la spra rtsis yun ring du bzo kyang ma grub pas; nyin cig bzo ba rnams kyis zas su song ba la mi ci yang [12] med pa'i shul du; lha gzugs blo bur du rang byon byung 'dug pas; des mi kun gyis skrag cing bstod pa dang [13] ngo mtshar chebs; de ci yin ces na; rgyal ba sras bcas rnams kyis mthus kyi rnams 'phrul mngon sum du gyur pa [14] yin pas; lan cig blugs pas grub pa yin; de'i dus 'jig rten na yod pa ma yin pa'i spos kyad par can gyi dri zhim [15] po dus rgyun du bro ba shing ; bkra shis kyi 'od zer rab tu rgyas pa dang; mtshan dang dpe' byad ldan pa'i mchog du bkra shis dam [16] pa'i brten 'di ni nan gyis kon ting tsing gyo hung tsi ta'i gu'i shri dpal ldan bzang po la phul nas; nub phyogs su brdzongs te; [17] 'gro ba kun la phan pa; dpag tu med pa'i mchog gi 'bras bu mdzad pas; rgya chen po'i bsod nams bskyed ba dang; [18] lo thog dus su smin pa dang; sems can thams cad 'byor pa dang; rgan gzhon so sor skyid pa nad rigs thams [19] cad zhi ba dang; bra shis yid bzhin du 'byung ngo; rtag tu/ sangs rgyas kyi drin thob pa'o; kye ; sangs rgyas kyi sku ni rang [20] bzhin du gyur pa; rtag tu yang dag par zhi ba'i slad du ; las dang; 'thun pa'i mngon du ma

char ba med pas; sgon gyi dus [21] su yul dbu rgyan gyi rgyal pos sangs rgyas can dhan gyi sku gzugs brko na'ng; thab bral gyi bzo bo rnams legs par [22] thob nas lha sku khyad par can bsgrubs pas; 'gro ba kun la phan par mdzad pa ni brjod gyis mi langs; da lta/~M` ngas [23] gser gyis lha sku bzhengs nas de'i rnam 'phrul slar yang 'di 'dra mdzad pa dang; phan pa slar yang 'di 'drar [24] mdzad pas; don 'di rnams bris nas rdo ring la brkos nas; /~M` sangs rgyas kyi bstan pa yun du dar zhing rgyas **pa** [25] dang bstod pa ni 'di skad du/ lam mchog 'phrin las mtho ba'i rkang gnyis gtso// khams gsum las grol ngo **mtshar rnam par** [26] che// 'gro ba kun la thabs kyis rgya chen mdzad// dge ba cig gis thams cad las 'dul ba// rten 'brel yod pa **rtogs pa rnam** [27] grol bas// mig brab mi g-yo tsam gyis sangs rgyas thob// bdag gis da lta sku mchog dam pa bzhengs// mtshan **sogs mdzes** [28] zhing mtshungs pa med pa dang / ngan gsum 'gro drug kun la phan mdzad nas// mngal dang drod sher so**gs skyes** [29] drin 'di thob// rtag tu smon pa 'jig rten 'gro ba kun// nyon mongs spang nas thams cad bde ba dang // bskal pa [30] snyigs lnga rnam par dag pa dang // bder gshegs rin chen go 'phang thob 'gyur te// byams dang snying [31] rje che zhing chos sku gsal// rdo rje brtan ltar 'jig pa mi mnga' ba'i// brjod kyi mi langs bskal ba [32] chen por yang // **byung ba thams cad chos rgyal la skyabs mchi'** // yun lo bcu drug pa'i lo zla ba gsum pa'i tshes cig gi nyin;

【注】

***l.* 4 rdzing**：原文は rdzing だが，池という意味になり文意と合わない [Jäschke 1985: 468]．謝 [1998: 94] に従い rdzings に訂正する．rdzings は舟の意味である [Jäschke 1985: 468, 張 1985: 2357]．

***l.* 5 khaMs**：原文の khaMs は khams である．

***l.* 7 char pa**：原文は pa だが ba に訂正する．チベット語文語文法では添後字

r の後には ba がつく [山口 1998: 514].

***l.* 8 pas**：原文は pas だが，文意から考えて pa に訂正する.

***l.* 11 spra rtsis**：原文は spra rtsis だが，文意から考えて spra tshil に訂正する. チベット文面和訳の *l.* 11 蠟型の注を参照.

***l.* 13 chebs**：原文は chebs だが，この語は Jäschke [1985]，張 [1985]，Goldstein [2001] には収録していない. 文意から考えて謝 [1998: 94] に従い che bas に訂正する.

***l.* 13 mthus**：原文の mthus は mthu に同じ [Jäschke 1985: 241].

***l.* 15 dpe' byad**：原文は dpe' byad だが，dpe byed に訂正する. チベット文語文法では a 母音で終わるもののみに添後字の ' が付される [山口 1998: 30].

***l.* 16 brten**：原文は brten だが，白館氏の指摘に従って rten とする. 動詞としての brten は rten pa の完了形もしくは未来形であるが [Jäschke 1985: 213]，この場合は名詞であり，名詞としての brten では情世間や有情の意味になり文意と合わない [張 1985: 1124]. 名詞の rten は拠り所あるいは仏像の意味 [Jäschke 1985: 213, 張 1985: 1072].

***l.* 16 gyo**：謝 [1998: 94] は gyi とし，陳・馬 [1990: 34] は gyo とする. 原文は gyo である.

***l.* 16 brdzongs**：原文は brdzongs だが，rdzong ba の過去形 brdzangs の誤記だと考えられる.

***l.* 20 'thun pa**：原文は 'thun pa だが，文意を考えて mhun pa に訂正する. 'thun pa だと集まりという意味になる [Jäschke 1985: 244].

***l.* 20 char ba**：原文は char ba だが，文意を考えて 'char ba に訂正する. char ba だと雨もしくは部分という意味になる [Jäschke 1985: 156].

***l.* 21 can dhan**：原文は can dhan だが，謝 [1998: 95] の訂正に従って tsan tan とする.

***l.* 21 thab**：原文は thab だが，謝 [1998: 95] の訂正に従って thabs とする. thab では炉という意味になり文意と合わない [Jäschke 1985: 229].

***l.* 24 rgyas pa**：この pa は筆者の写真[**Plate XV**]では判読できなかったので，陳・馬 [1990: 口絵] の写真によった．

***l.* 25 mtshar rnam par**：この mtshar rnam par は筆者の写真 [**Plate XV**] では判読できなかったので，陳・馬 [1990: 口絵] の写真によった．

***l.* 26 rtogs pa rnam**：この rtogs pa rnam は筆者の写真 [**Plate XV**] では判読できなかったので，陳・馬 [1990: 口絵] の写真によった．

***l.* 27 sogs mdzes**：この sogs mdzes は筆者の写真 [**Plate XV**] では判読できなかったので，陳・馬 [1990: 口絵] の写真によった．

***l.* 28 sogs skyes**：この gs skyes の部分は筆者の写真 [**Plate XV**] では判読できなかったので，陳・馬 [1990: 口絵] の写真によった．

***l.* 31 mi mnga' ba'i**：原文は 'i だが，文意を考えて終助詞の 'o に訂正する．

***l.* 32 byung ba thams cad chos rgyal la**：この部分は筆者の写真 [**Plate XV**] では上部しか判読できなかったので，陳・馬 [1990: 口絵] の写真に照らし合わせて再構成した．

(4) チベット文面和訳

[碑首] 皇帝が金仏像を讃える碑文．

[1] 皇帝がお作りになった仏シャカムニの自然に生じた金仏像を褒め称える〔言葉を〕石碑に置いた．[2] 如来の何百何千何十万に化身したものは衆生に〔対して〕慈悲 [3] を〔施し〕なさり，〔衆生を〕三悪趣から引き上げ，〔それらの化身が〕大方便となったのは善きかな，善きかな．[4] 教化する対象を仏の道に置いた〔その行為は〕苦海の船のようでもあり，闇の洲 [5] の日月のようでもある．もし仏の功徳が完成して有情全てに利益をもたらすならば，三界 [6] の神・人間達が信仰と帰依を行ない，それら〔の行為〕によって〔生じる〕香気の雲は天空を覆い法 [7] の雨は全てに降って，それによって大地と山湖の全ては仏国土となり，衆生全て [8] が利益を得るのである．私が

全国土の主人になり，有情全てへの利益 [9] と広い慈悲による喜びの発心〔を起こし〕，金で仏の [10] 御身体を鋳造して，衆生全てに利益をもたらすことを思い，大工達に仏像を作らせ [11] たのに対して，仏像の蠟型を作ろうとしても長い間完成せず，ある日大工達が食事に行き，誰も [12] いない間に仏の姿が突然に自然に生じたので，それで全ての人が畏怖して褒め称えた．[13] とても稀有なので，それが何であるかというならば，諸仏菩薩による力の神通が現実に生じた [14] ので，一回で〔仏像の〕鋳造が完成したのである．その時に世間に存在しない特別な香の匂い [15] が絶え間なく漂い，吉祥の光が特別に広がった．仏にある三十二相と八十種好が備わっている最高の吉祥の [16] この仏像は，特別に灌頂浄覚弘済大国師ペルデンサンポに献じることによって西方につかわして，[17] 衆生全てに無量の利益である最高の果を与えなさったことにより，広大な福徳，[18] 農作物の収穫，有情全てに富，老若それぞれに幸せ，全ての病人に [19] 安らぎ，〔そして〕吉祥が意の如く生じる．常に仏の恩を得たのである．仏の像は自然に [20] 生じて，いつも清浄な寂静のために縁と合致する所に現れないことは無いので，昔に [21] ウギェンの国の王が栴檀の仏像を彫ろうとして，素晴らしい大工達を良く [22] 得て，特別な仏像が完成して，衆生全てに利益があるようになさった事は言葉では語り足りない．今，私が [23] 金で神像を建立してその神通もまたこう [24] なり，利益もまたこうなったので，この事を書いて石碑に彫った．仏の教えが長く盛んで，広く [25] 賛美するために，以下のように述べる．正道の事業が高い両足尊は，三界より解脱することがとても稀有で，[26] 衆生全てに方便によって広大〔なことを〕なさって，一善で全ての業を教化する．縁起の存在を理解するものは [27] 解脱するので，瞬きして動かないだけ〔の間に〕仏を得た．私が今，至高にして無上なる像を建立する．形状は美しく [28] 二つと無く，三塗と六道全てに利益をなさって，子宮から生まれる生き物と湿気から生まれる生き物（虫類）は [29] この恩を得た．常に願うことは世間の衆生全て〔である〕．煩悩を捨てて一切が幸せ〔になり〕，劫の [30] 五濁が清浄

〔になり〕，善逝の位を得るようになって，仁慈が [31] 大きくて法身が現れ，金剛が堅固なように壊れない，説いても説き尽くせない大劫 [32] においても，生じる全てが法王に帰命する．永楽十六年三月一日．

【注】

***l.* 1** 自然に生じた：rang byon について，張 [1985: 2651] の訳語は「天然」．人の手を経ないで神仏の力で生じた仏像や文字を指す．漢文は「御製金佛像碑」とする [1 行]．チベット文の「rang byon, 自然に生じた」に対応する語が漢文面には無い．

***ll.* 2-3** 如来の～慈悲を〔施し〕なさり：チベット文面は「de bzhin gshegs pa'i ~ snying rje mdzad pa」．仏が衆生を教化・救済するために種々の形になって世間に現れることを指す [中村・福永等 2002: 268 化現の項，同: 272 化身の項]．

***l.* 4** 教化する対象を仏の道に置いた：チベット文面「'dul ba'i ~ bkod cing」は，漢文では「羣生を總て攝り，咸な覺道に登らしむるに」[2 行]．漢文面の「總攝羣生」をチベット文面では名詞ととって「'dul ba'i gdul bya rnams, 教化する対象達」と訳したのか．チベット語の 'dul ba に対応する漢語を榊 [1962: No. 1414, p. 109] では「律」「調伏」とする．漢語の「攝」をチベット語の「教化・調伏 ('dul)」と訳す事例は漢文面 [12-13 行]，チベット文面 [26 行] にもある．なお，横山・広沢 [1997: 580] では 'dun par byed pa の漢訳を「引攝」とする．「引攝」とは，仏が慈悲心によって衆生を導くこと [中村 2001: 88]．あるいはチベット文面の 'dul は 'dun の誤りである可能性もあるが不明である．

***ll.* 4-5** 苦海の船，闇の洲の日月：チベット文面は「sdug ~ nyi zla」．仏が世間に生きる衆生のよりどころとなることを言っている．

***ll.* 7-8** 衆生全てが利益を得る：チベット文面は「'gro ba ~ yin no」．これに対応する漢文は「含靈・蠢動は悉く濟度を得る」[3-4 行]．漢文面の「含靈・蠢動」をチベット文面は「衆生」とする．

***l.* 10** 鋳造して：チベット文原文は blugs．張[1985: 1917]では，動詞 blug の過去形とし，「注入，装入」の訳語が付けられている．本文の blugs は，金属を型に流し入れて仏像を鋳造する行為を指していると考えられるのでこのように訳した．なお，張[1985: 1917]では，名詞の blugs に「鋳造品」という訳語を付けている．

***ll.* 10-11** 仏像を作らせた：チベット文原文は bzor chug pa．bzo par chug の省略した表記と考えてこの訳にした．

***l.* 11** 蠟型：チベット文原文は spra rtsis だが，蜜蠟を意味する spra tshil であろう．Jäschke [1985: 335] では spra tshil を wax とする．仏像を作る際には蜜蠟で原型を作る [中村・久野 2002: 966]．spra tshil は，この原型を指しているのであろう．漢文では「範」とする [4 行]．

***l.* 12** 仏の姿：原文は「lha gzugs, 仏の姿」だが，仏の蠟型を指している．

***ll.* 13-14** 諸仏菩薩による力の神通が現実に生じたので：チベット文面は「rgyal ba ~ yin pas」．これに対応する漢文面は「諸佛菩薩が顯應し，神通を示現せりと」[5 行]． 漢文の「顯應し，神通を」をチベット文は「mthus kyi rnams 'phrul, 力の神通」とする．榊[1962: No. 767, p. 58]では rnam par 'phrul ba'i stobs を「神通力」「神変力」と漢訳し，横山・広沢 [1997: 622] では「神変，変現」と漢訳しているので，「顯應」に対応するチベット語が無い．この意味については後述する．

***l.* 15** 吉祥の光が特別に広がった：チベット文面「bkra shis ~ rgyas pa」は漢文面では「瑞光は圓滿，毫相は瑞嚴にして」[6 行]．漢文の「毫相は瑞嚴」に対応する語がチベット文には無い．

***l.* 15** 三十二相：チベット文面は mtshan．榊 [1962: No. 235, p. 22] にある「skyes bu chen po'i mtshan sum cu rtsa gnyis kyi ming la, 大丈夫三十二相名號」の略語だと考えられる．三十二相とは，仏及び転輪聖王に備わる三十二の優れた身体的特徴 [中村・福永等 2002:386-387]．

***l.* 15** 八十種好：チベット文面は dpe' byad．榊 [1962: No. 268, p. 24] にある

「dpe byad bzang po brgyad (b)cu'i ming la, 八十種好名號, 八十種形好名號」の略語だと考えられる．八十種好とは，仏や菩薩にともなうとされる優れた八十の特徴で，三十二相に比べると比較的小さな特徴とされる[中村・福永等 2002: 824]．

***l.* 15** 仏にある三十二相と八十種好が備わっている最高の吉祥の：チベット文面「mtshan ~ bkra shis dam pa'i」は漢文では「諸の種好を具えるは，是，最妙の吉祥為り」[6 行]．チベット文にある「三十二相と八十種好」を漢文面は「諸の種好」とのみ記す．

***l.* 16** 特別に灌頂浄覚弘済大国師ペルデンサンポに献じることによって：チベット文面「nan ~ phul nas」は，漢文では「特に以って灌頂淨覺弘濟大國師班丹藏卜に布施し」[6-7 行]．チベット文面の「kon ting tsing gyo hung tsi ta'i gu'i shri」は漢文面の「灌頂淨覺弘濟大國師」の音写と考えられるが，「覺」を gyo と音写する．

***l.* 20** 縁と合致する所に現れないことは無いので：チベット文面「las ~ med pas」は漢文面では「故に感じて應ぜざるは無し」[9 行]．この意味については後述する．

***ll.* 21-22** 素晴らしい大工達を良く得て：チベット文面は「thab bral ~ thob nas」. thabs bral を素晴らしいと訳すのは，白館氏の教示による．thabs bral は，張 [1985: 1149] では「無法，方法が無い」とするが，文意と合わない．「thabs bral, 方法と離れた」は，人間の取り得る手段を超越するほど素晴らしいという意味だと考える．また，チベット文面「素晴らしい大工達を良く得て」は，漢文面では「忉利天匠を妙感すること」[9-10 行] とする．この意味については後述する．

***ll.* 22-24** 私が金で神像を建立してその神通もまたこうなり：チベット文面「ngas ~ mdzad pas」は漢文では「朕は今，金をもって像を鑄するに，感應は復た此の若し」[10 行]．漢文面の「感應」をチベット文では「rnam 'phrul, 神通」とする．チベット文面 *ll.* 13-14 の語注で述べたように，榊 [1962: No.

767, p. 58]では rnam par 'phrul ba'i stobs を「神通力」「神変力」と漢訳し，横山・広沢［1997: 622］では「神変，変現」と漢訳している．この意味については後述する．

***l.* 25** 正道の事業が高い両足尊は：チベット文面「lam mchog ~ rkang gnyis gtso」は，漢文面では「道徳の巍巍たる兩足尊」［12 行］．漢文の「道徳」をチベット文は「lam mchog 'phrin las, 正道の事業」とする．

***l.* 25** 解脱：チベット文面の「grol, 解脱」を漢文面では「超出」［12 行］とする．横山・広沢［1997: 378］は，grol に対応する漢語を「解脱」としているので，これに従う．

***l.* 26** 一善で全ての業を教化する：チベット文面「dge ba cig ~ 'dul ba」は漢文面では「一善を以って一切を攝らば」［12-13 行］．漢文の「攝」をチベット文では「'dul, 調伏」とする．チベット文面 *l.* 4 への語注を参照．

***l.* 27** 解脱：チベット文面の「grol, 解脱」は，漢文面では「超悟」［13 行］であるが，訳は「解脱」とする．チベット文面 *l.* 25 解脱の注を参照．

***l.* 27** 仏を得た：チベット文面「sangs rgyas thob」は，漢文面では「圓融」［13 行］とする．「圓融」は天台宗及び華厳宗の用語であり，完全にして欠けることなく一体となって互いを妨げないこと［中村・福永等 2002: 104］．

第 2 章　「御製金仏像碑」の史料的価値についての検討

本章では「御製金仏像碑」が信頼できる史料であることを碑文の形式と内容の二点から証明したい．

「御製金仏像碑」は，碑高 2 m，碑幅 1 m，碑厚 0.3 m 程.[(7)] 亀趺が無いので碑の陽と陰は明確にわからないが，片面に漢文，片面にチベット文が刻されている．漢文とチベット文があることは，筆者が把握している限りでは明朝

(7)　瞿曇寺の各碑文の寸法は陳・馬［1990］に記されているが，本碑文の寸法は記載されていない．しかし，筆者の目測では永楽 16 年「皇帝勅諭碑」とほぼ同じである．永楽 16 年「皇帝勅諭碑」は，碑高 2.2 m，碑幅 1.16 m，碑厚 0.32 m［陳・馬 1990: 14］．

の行政文書のそれと共通したものである.[8] ただ，他の文書は官位や法位を授与する内容のものが多いが，「御製金仏像碑」は下賜した仏像の由来として宗教的な奇瑞を述べている点が特徴といえる.[9]

漢文面とチベット文面では内容に大きな違いは無いが，チベット文の訳注で示したように漢文とチベット文では語が対応していない箇所がある．特に中国仏教の概念である「感應」に関する語については，チベット文では直訳していない箇所がある．中国とチベットの仏教思想の違いを示す事例と考えられるので，これについて述べたい．

第1章のチベット文面の訳注において指摘したが，整理のために再度示す．「感應」について述べている箇所は以下の四箇所である．

① 漢文面［5行］：漢文面の「顯應」を，チベット文面［13-14行］では「力」としている．

② 漢文面［9行］：漢文面の「感じて應ぜざるは無し」を，チベット文面［20行］では「縁と合致する所に現れないことは無い」としている．

③ 漢文面［9-10行］：漢文面の「忉利天匠を妙感すること」を，チベット文面［21-22行］では「素晴らしい大工達を良く得て」とする．

④ 漢文面［10行］：漢文面の「感應」を，チベット文面［23-24行］では「rnam 'phrul, 神通」とする．

---

(8) 明朝がチベット仏教僧に交付した勅書は，漢文とチベット文の合璧である事例が多い．例えば『西藏歴史檔案蒼粹』，『寶藏』に写真版が収録されている明朝の勅書のほとんどが漢文・チベット文の合璧である［No. 24-30］.

(9) なお，「賜給大寶法王的詔書」［永楽11年(1413) 2月初10日，西藏文物管理委員會 1981: 43］は，永楽帝がカルマ派黒帽転生ラマ五世テシンシェクパ (de bzhin shags pa) に仏像を授与した内容である．「御製金仏像碑」と類似したものであるが，詳細な検討は今後の課題としたい．なお「賜給大寶法王的詔書」は『西藏歴史檔案蒼粹』，『寶藏』に収録されていない．

以上において示したように，漢文の「感」もしくは「應」に対応する語がチベット文では直訳されていない．「感」とは衆生が自らのうちに仏菩薩を感得し引き寄せることで，「應」とは衆生に向かって仏菩薩が差別なく赴くことをいい，中国仏教の思想である感応思想に関する語である[福島 1970: 38-39]．④では「感應」をチベット語の「rnam 'phrul, 神通」とするが，①，②，③でそれぞれ別のチベット語になっているように訳語の統一が無い．これは感応思想が中国仏教独自の思想であるため，対応する語がチベット仏教の用語には無かったためだと考えられる[10]．チベット語訳が適切なものであるかどうかは筆者には判断する力はないが[11]，中国とチベットの仏教思想の違いが訳語にどのように現れているかを考察できる事例として指摘したい．

続いて，「御製金仏像碑」の漢文面とチベット文面の形式を，一次史料である明朝の檔案史料と比較しながら検討していきたい．

漢文面について述べる．漢文では「佛」を擡頭している[9行]．「佛」が擡頭されている例は他の明朝の公文書・碑文には確認することができなかった．しかし，「佛」とほぼ同義語である「如来」を改行して平出する事例がある[12]．また「御製金仏像碑」では「朕」を擡頭していないが[4, 10行]，明朝が他のチベット僧に交付した漢文勅書も「朕」を擡頭していない[13]．

チベット文面について述べる．敬意の表現については，漢文面にみられる改行，平出，空格，擡頭は用いていない．しかし，陳・馬[1990]の写真でははっきりと確認できず，陳・馬[1990]や謝[1998]の録文には示されていな

---

(10) インドの大乗仏教においては仏の衆生救済という宗教的問題をめぐって，特別な菩薩ではない衆生の成仏が説かれた．感応思想はインドの大乗仏教で論議された仏による衆生救済という問題を受け継ぎ，『周易』や『荘子』に見られる中国伝統の感応思想を利用しながら中国独自の形に発展させたものである[菅野 2007: 33, 46-47]．

(11) ③において漢文の「感」をチベット文では「得て」と訳しているのは適切な訳だと考えられる．

(12) 「噶瑪巴爲明太祖荐福圖」[『寶藏』3冊: 96]．

(13) 例えば「永楽皇帝給尚師哈立麻的書信」[永楽5年(1407) 5月18日，『西藏歷史檔案薈粹』No. 24]．なお，明朝の御製文では一般的に朕を擡頭する例はみられない．

いが，筆者が実見した結果，二つの特徴があることがわかった．

まず，ほとんどの文の切れ目にはシェー（ / , Tib. shad）では無く，ツェクシェー（ ; , Tib. tsheg shad ）を使っている[14]．これと類似したシェー は明朝がチベット仏教僧に交付したチベット文檔案に用いられている[15]．

次に，上にナデン（sna ldan, ~M`）を置いたシェー（ /~M` ）が，皇帝の自称である我（Tib. nge），仏（Tib. sangs rgyas）の前につけられている［8, 22, 24 行］．この用法も明朝がチベット仏教僧に交付した檔案と類似している．永楽 5 年（1407）正月 18 日にカルマパ五世テシンシェクパに交付した勅書では，テシンシェクパを指す「ラマ（Tib. bla ma）」と皇帝の自称である「我（Tib. nged）」の前にトゥルシェー（Tib. sbrul shad ）が使われている［注（13）参照］．恐らくは敬意の表現と考えられるが，特殊なシェーを用いていることは共通している．

以上述べてきたことから，「御製金仏像碑」の形式は一次史料である明朝の檔案と類似していることが明らかになった．

次に碑文の記述の信憑性について検討したい．碑文の内容を簡単にまとめると以下のようになる．① 永楽帝が衆生済度のために金仏像を製作しようとする［漢文：4 行］．② 人間の工匠では仏像の原型が完成できなかったところ，諸仏・菩薩が示した奇瑞によって理想どおりの仏像ができる［漢文：4-6 行］．③ そして西方の民衆を済度するため，瞿曇寺の僧侶である灌頂浄覚弘済大国師班丹蔵卜（Tib. kon ting tsing gyo hung tsi ta'i gu'i shri dpal ldan bzang po，以下ペルデンサンポとする）に下賜する［漢文：6-9 行］．

これらの中で ① と ② については宗教的な奇瑞であるため実際に起きた出来事を述べたのかどうかは判断しがたい．またこれについて述べた他の明朝の史料を発見することはできなかった．しかし，③ のペルデンサンポに仏像を下賜

(14) 一般的にチベット語では文の切れ目にシェーを用いる．

(15) 『西藏歴史檔案薈粋』No. 24-30．なお，これと類似した形のシェーは元朝のチベット文文書にも用いられている事例がみられる［『西藏歴史檔案薈粋』No. 9 等］．元朝のチベット文文書と明朝のチベット文文書の比較検討は今後の課題としたい．

したことについては，それが実際にあった出来事だと考えられる．以下それについて述べる．

まず，「御製金仏像碑」に記載されるペルデンサンポについて検討したい．[16]

ペルデンサンポが瞿曇寺でどのような立場の人物であったかという点については，同寺に建立されている永楽6年（1408）「皇帝勅諭碑」（永楽6年（1408）5月15日付け）に記述がある．[17]

漢文：其侄班丹藏卜，端約藏卜，演如来之教法，悟大乗之真詮，以慈悲導一方，以善行化衆類，以嗣承其叔三羅之宗教．朕甚嘉之．今特令住持瞿曇寺．
其（喇嘛三羅）の侄班丹藏卜，端約藏卜，如來の教法を演じ，大乗の真詮を悟り，慈悲を以って一方を導き，善行を以って衆類を化し，以って其の叔・三羅の宗教を嗣承す．朕，甚だ之を嘉す．今，特に瞿曇寺に住持せしむ．

チベット文：da lta on(dbon?) po dpal ldan bzang po/ don yod bzang po/ de bzhin gshegs pa'i bstan pa la bslab shing theg chen don rtogs shing / snyin rje'i sems kyis mi rnams khrid cing dge lam la mi rnams sgrol ba/ rang gi bla ma bsam lo'i cho lugs 'dzin pas/ nged kyis shin du bstod pa byas/ da lta nan gyis khyod la khyu tam si'i sde dpon byas pa/
今，〔前任者の〕甥で後継者でもあるペルデンサンポ，トンユーサンポは，如来の教えを学び，大乗を悟り，慈悲の心によって人々を導き善い道に人々を運ぶ．自身の師であるサムローの法流を保持したことにより，私は〔彼を〕とても称えた．今，特にお前をキュタムシー（瞿曇寺）の長にする．

ここでは，ペルデンサンポが瞿曇寺の名を皇帝より下賜された喇嘛三羅（Tib. bla ma bsam lo）の後継者として，端約蔵卜（Tib. don yod bzang po）なる人物と

(16) ペルデンサンポについては，陳・馬［1990: 12-13］に解説があるが，記述の根拠となる史料を示さない簡単なものである．

(17) この碑文は実見できなかった．写真は陳・馬［1990: 口絵］にあるが，不鮮明で判読が困難だったため，謝［1998: 88-89］の録文によった．

ともに明朝から瞿曇寺の住持に任命された人物であることが述べられている.[18]

そして明朝中央の史料である『明太宗實録』においてもこの人物と同定できる僧侶の記事が確認できる.

『明太宗實録』によれば, 永楽5年(1407)10月戊戌に西寧瞿曇寺の僧侶である班丹蔵卜が来朝している.[19] この班丹蔵卜は, 永楽8年(1410)10月甲午に浄覚弘済国師号を与えられ,[20] 永楽10年(1412)正月庚戌に大国師号を与えられている. その時の法位は以下のように述べられている.

『明太宗實録』巻124, 永楽10年(1412)正月庚戌の条
命じて國師班丹藏卜を灌頂淨覺弘濟大[國]師と爲す.

引用史料には「國」の文字が無いが, 同書の巻127, 永楽10年4月戊寅の条には「灌頂淨覺弘濟大國師班丹藏卜」と記載されており, また, 明朝がチベット人僧侶に与えた法位に大師号は管見の限り見あたらないので, 筆写の際に欠落したものと考えられる. ここで班丹蔵卜が与えられた灌頂浄覚弘済大国師は「御製金仏像碑」に記載されるペルデンサンポの法位と一致している.

以上述べてきたことから, 『明太宗實録』に記載される班丹蔵卜と「御製金仏像碑」に記載されるペルデンサンポは同一人物である. 瞿曇寺の僧侶ペルデンサンポが明朝と密接な関係を持っていたことが瞿曇寺と明朝双方の史料からわかる.

---

(18) 漢文の侄はチベット語で on po としるされている. これは正しくは dbon po であり, 甥と後継者の双方の意味を含む. チベット仏教の氏族教団の叔父甥相続制度に基づく語である. 叔父から甥へ寺院の長の地位を相続していることから, 瞿曇寺はペルデンサンポの一族によって経営される寺院だったと考えられる.

(19) 「西寧瞿晏(曇)寺僧班丹藏卜來朝貢馬」[『明太宗實録』巻72, 永楽5年(1407)10月戊戌の条].

(20) 「命番僧班丹藏卜爲淨覺弘濟國師」[『明太宗實録』巻109, 永楽8年(1410)10月甲午の条].

そして明朝はチベット仏教僧に仏像を下賜していた．例えば永楽4年(1406)に南京に来たカルマパ五世テシンシェクパが永楽6年（1408）にチベットに戻る時，

『明太宗實録』巻78，永楽6年（1408）4月庚子の条
如來大寶法王・哈立麻(カルマパ)辭歸す．白金，綵幣，佛像等物を賜う．

とあるように仏像を下賜している．またゲルク派に対しても，

『明太宗實録』巻176，永楽14年（1416）5月辛丑の条
妙覺圓通慧慈輔應輔國顯教灌頂弘善西天佛子大國師・釋迦也失(シャキャイェシェー)，辭歸す．御製贊を之に賜う．並に佛像，佛經，法器，衣服の文綺，金銀の器皿を賜う．

と述べられているように，ツォンカパの高弟である釋迦也失(シャキャイェシェー)に，御製の賛文と仏像の下賜が行なわれている．以上のことからペルデンサンポが永楽帝から仏像と御製文を賜ったことは実際に起きた出来事だと考えられる．

第3章　「御製金仏像碑」の内容について—大乘仏教思想に基づく造像功徳—

本章では「御製金仏像碑」の内容について検討し，それが大乘仏教の思想に基づいた永楽帝の功徳(21)を宣伝するものであったこと，その宣伝の対象にはインドから漢地に至るまでの西方の仏教文化圏全体が含まれていたことを明らかにしたい．

まず，永楽帝が金仏像の製作を行なった理由は以下のように述べられている．

(21)　功徳とは，造像・起塔・写経などの善行や，善行に備わった徳性，善行の結果としての果報や利益をさす［中村・福永等 2002: 254］．

「御製金仏像碑」[漢文：4 行の和訳]

朕は天下を支配して，万民をあわれみ思い，ひろく慈悲を形にして，喜びの発心によって金で仏像を鋳造して，衆生全てに利益をもたらそうとした．

ここでは永楽帝が衆生に利益をもたらそうとする目的で仏像を製作したことが述べられる．この仏像製作は，凡夫の手の届かぬ涅槃の世界に入ってしまった仏を求め，応身の仏である仏の形象を作り，礼拝することによって衆生救済を得ようとする大乗仏教の思想に基づくものである [平川 1981: 45]．

そして「御製金仏像碑」には永楽帝の仏像製作を宣伝する記述がある．

「御製金仏像碑」[漢文：9-10 行の和訳]

昔，優填王が旃檀の仏像を作った時に，忉利天匠を感得したことはとても稀有なことで一切〔の衆生に〕際限なく利益をもたらした．今，私が黄金で仏像を鋳造したところ，優填王のような感応が起こった．そのため〔衆生に〕利益をもたらすことも優填王のように〔際限がない〕．

ここでは永楽帝が自分の仏像製作を過去の優填王のそれになぞらえていることが述べられている．優填王とは優陀延王とも表記される釈尊在世中の仏教保護王で，ヴァンサ国コーサンビーを統治していた．釈尊が忉利天に昇って人間世界を留守にしていた時，釈尊を慕って梅檀を用いて仏像を彫刻したという伝説がある [中村・福永等 2002: 74]．この伝説は，それが歴史的事実であるかどうかに関しては疑問が残るものの，仏像の製作のはじまりとされている [高田1987: 2]．この伝説は『增一阿含經』等，多くの経典に述べられている [高田1967: 10-15]．

では「御製金仏像碑」にある，優填王が旃檀の仏像を作る際に，忉利天匠を感得することによって，全ての衆生に利益をもたらしたという記述の出典は何か．それは，『大乘造像功德經』に述べられている，優填王が仏像を製作し

ようとした時，人間の工匠では作れずにいたところ，王の信仰に応じた天匠毘首羯磨天が現れ，仏像を作ったという記述であろう[22]．これは「御製金仏像碑」において人間の工匠では仏像を完成できず，仏菩薩の力によって，仏像を完成することができたという記述と類似している．ここから，永楽帝が優填王に自らをなぞらえていることがわかる．

この優填王の仏像製作は，『大乘造像功徳經』において次のように賛美されている．

『大乘造像功徳經』[『大正新脩大藏經』16 冊，793a]
皆稱讃於王造像功徳．凡諸天衆悉亦隨喜．未來世中有信之人．皆因王故造佛形像而獲勝福．
皆〔優填〕王の造像功徳を稱讃す．凡そ諸の天衆は悉く亦た隨喜す．未來世の中の有信の人，皆〔優填〕王の故に因りて佛の形像を造りて勝福を獲る．

ここでは，優填王の仏像製作は後世の模範となるものとされている．永楽帝が優填王に自らをなぞらえた理由は，この王が仏典中においてその功徳を賛美された存在だったからだということがわかる．

以上のことから，「御製金仏像碑」の内容は，大乘仏教の思想に基づいて衆生救済を祈願し，それに諸仏菩薩が応えた永楽帝の功徳を宣伝するものであるといえる．

では「御製金仏像碑」は，どのような対象に向かって永楽帝の信仰心を宣伝したのか．まず，「御製金仏像碑」がとりあげた優填王の伝説に注目したい．優填王の製作した旃檀仏がインドから中央アジアを巡って漢地に渡来したという逸話が，漢地にある．漢地への優填王像将来譚を詳細に検討した稲本氏によれば，唐の貞観 19 年（645）に玄奘がインドから帰還した際，多数の経典とともに優填王の旃檀仏の模像をも将来し［稲本 1997: 387］，また，元代

(22) 『大乘造像功徳經』[『大正新脩大藏經』16 冊，790a-791b]．

にはこの旃檀仏がインドや中央アジアを経由して漢地に渡来し各地を流伝した経緯をまとめた「栴檀瑞像中国渡来記」が成立している.[23]

このように優填王の旃檀仏が，インドから中央アジアをへて漢地へ入ったという伝説が流布していることから，「御製金仏像碑」がインドを初めとする西方の仏教文化圏と漢地との仏教交流を視野に入れていることが推測される.

この推測を裏付けるものとして，永楽帝の仏像がペルデンサンポに与えられて「西土」に行くことにより，その地域の衆生が救済されることが，「御製金仏像碑」に述べられている [漢文：6-9 行].

「御製金仏像碑」の西土とはどのような地域を指すのだろうか．永楽帝によるチベット語大蔵経建立の際の明・チベット間の交渉を検討した羽田野氏は，西土について「広義のチベッド」を指すとしている [羽田野 1987: 332]．しかし，西土は必ずしもチベットを指すとは限らない.[24] 元代に成立した「旃檀仏像記」には以下の一文がある.

> 「旃檀仏像記」『程雪樓文集』巻 9, 11 葉表
> [旃檀仏]像居西土一千二百八十五年，龜茲六十八年，涼州一十四年…….
> [旃檀仏]像，西土に居すること一千二百八十五年，龜茲に六十八年，涼州に一十四年…….

これは優填王の旃檀仏がインドから漢地に渡来したことを述べている．百濟氏は，この西土はインドを指すと正しく述べている [百濟 2004: 76]．「御製金仏像碑」が永楽帝の金仏像を優填王の旃檀仏になぞらえていることから，「御製金仏像碑」の「西土」もインドを指すと考えられる．青海の瞿曇寺がインドと接しているという考え方は現実の地理からは成立し難いが，明初においては青海

(23) 百濟 [2004] において「栴檀瑞像中国渡来記」についての文献学研究が行なわれている.

(24) 例えば Franke [1981: 297] は，「西僧」の語義について述べる際に，元代においては「西」はチベット，ネパール，インドをも含む広い範囲を指すとしている.

がインドと接しているという考え方があったらしい．瞿曇寺に建立されている洪熙元年（1425）「御製瞿曇寺碑」に次のような記述がある［漢文：9行］.[25]

西寧接壤天竺．乃佛所從入中國者也.

西寧は天竺に接壤す．乃ち佛の中國に從入する所の者なり.

ここからは，瞿曇寺のすぐ西方にある西寧はインドとの境界と考えられていたことがわかる．厳密かつ具体的なインドではなく，仏教の源流としての西方の仏教文化圏としてのインドを観念的に指していると考えられる.[26] 以上述べてきたように「御製金仏像碑」は，「梅檀瑞像中国渡来記」とは逆に，永楽帝の仏像がインドに至るまでの地域の衆生を救済することを述べたものである．永楽帝は，自らの功徳を宣伝する対象に，西方の仏教文化圏を含めていたことがわかる.

第4章　東西の仏教文化圏の境界としての瞿曇寺

第3章では，「御製金仏像碑」が大乗仏教思想に基づく永楽帝の造像功徳を宣伝するものであったことを明らかにし，かつその宣伝の対象がインドに至るまでの西方仏教文化圏とされていることを論じた．本章では，それを補強する目的で，瞿曇寺に現存する洪熙元年(1425)「御製瞿曇寺碑」(以下，「御製瞿曇寺碑」とする)に対する検討を通じて，同寺が漢地と西方の仏教文化圏の交流において重要な役割を果たす寺院であると，明朝からみなされていたことを述べたい.

---

(25)　洪熙元年（1425）「御製瞿曇寺碑」については，2004年9月に筆者が実見した．これについては後述する.

(26)　この漢文に対応するチベット文は「zi ling sa cha de ni/ nub phyogs kyi yul khams dang 'brel ba'i sa tshams yin, 西寧の地は西方の地域と接する境界である」[チベット文面：17行]．一般的にはインドを意味するチベット語は rgya gar であるが，ここでは天竺に対応するチベット語を「nub phyogs, 西方」としている.

先ず「御製瞿曇寺碑」について述べる.[27] 碑文の写真は陳・馬[1990: 口絵]にチベット文・漢文双方があるが，全文を判読するには不鮮明である．筆者が現地で碑文を実見した所，「御」，「朕」，「我」は擡頭されておらず，「佛氏」，「太祖」，「太宗」，「祖宗」，「二聖」，「天命」の語が擡頭されていた．「朕」が擡頭されていない点については，明朝が他のチベット僧に交付した漢文勅書も同じである[注(13)参照]．また「佛氏」，「太祖」の擡頭については，「噶瑪巴爲明太祖荐福圖」では「佛氏」と類似した語である「如來」を改行し[注(12)参照]，「皇考太祖高皇帝」を二字擡頭している[『寶藏』3冊：97]．漢文面については，「御製瞿曇寺碑」は明朝の公文書の形式に従っているといえる.[28]

この「御製瞿曇寺碑」に次のような一節がある[漢文：9-11行]．

> 獨寥寥稀闊焉．豈稱崇奬之意．於是命官相土，審位面勢，簡材飭工，肇作蘭若，高宏壯麗，賜名瞿曇．自是中國之人往使西域，及西域之人入朝中國者，至此而欲攄誠邀福，有帰依之地焉．
>
> 〔西寧が〕獨だ寥寥にして稀闊なり．豈に〔佛への〕崇奬の意を稱えんや．是において官に相土を命じ，位の面勢を審らかにし，材を簡び工に飭じ，肇めて蘭若を作り，高宏にして壯麗，名を瞿曇と賜う．是より中國の人の西域に往使し，及び西域の人の中國に入朝するは，此に至りて攄誠し邀福するを欲せば，帰依の地あるなり．

これは洪武26年(1393)に瞿曇寺が寺名を下賜された理由を述べたものである.[29] 洪熙元年の碑文なので，三代前の洪武朝の状況を正確に伝えている

---

(27) 陳・馬[1990: 43]によれば，碑高2.28 m, 碑幅2.23 m, 碑厚0.63 m.

(28) 同碑文のチベット文面については筆者の撮影した写真が不鮮明であったため，「御製金仏像碑」と同様のシェーを用いた敬意の表現が使われているかどうかは判読できなかった．

(29) 瞿曇寺が寺名を下賜された記事は，『明太祖實錄』巻225, 洪武26年(1393)2月壬寅の条にみえる．

とは言いがたいものの，直前の永楽朝における明朝の瞿曇寺への評価を示していると考えられる．その内容は漢地と西域を往復する使節の信仰の拠点として瞿曇寺が建立されたというものである．

文中の西域という用語について述べると，明初における漢地から西域への僧侶の遣使を検討した長谷部氏によれば，「西域」は西蔵，ネパール，東北インド等，漢地の西方に位置するかなり広い地域を指していた［長谷部 1993: 56］．

そして，ここで述べられている漢地より西域に赴く明朝の使節については，明初においてインド，ネパールに派遣された宗泐，智光の事例がある．(30) この中で宗泐の行程については，Enoki［1998］，鄧［1992］においてその詳細が明らかにされている．それによれば青海からチベットを経てインドに入っている．その際の青海の行程を述べると，河州から西寧に入っている［Enoki 1998: 549, 鄧 1992: 229］．瞿曇寺のある楽都県は河州と西寧の間に位置する．鄧［1992: 230］においては楽都を経由したかどうかは不明としているが，同寺の近辺を通ったことは確実である．

また，西域から漢地に来る使節はどうか．インドからの使節が明朝に派遣された史実は確認できなかったが，(31) 明朝に派遣されたネパールの使節が帰途に瞿曇寺の近辺を通った事例がある．

洪武・永楽両朝を通じてネパールからの使節の来朝は盛んであった［Petech 1984: 213-223］．当時のネパールはマッラ王朝（9 世紀末～ 1769）の統治下において仏教が盛んであり，サンスクリット経典の書写も行なわれ，現在チベットに残存しているサンスクリット経典の写本はネパールからもたらされたもの

---

(30) 宗泐は，洪武 11 年（1378）～洪武 15 年（1382）にインドへ派遣されている［Enoki 1998, 鄧 1992］．智光は，洪武 17 年（1384）～同 20 年（1387）にかけてネパール，インドへ，同 21 年（1388）～同 23 年（1390），建文 4 年（1402）～永楽 3 年（1405）にかけてネパールに派遣されている［鄧 1994］．

(31) インド出身の僧侶具生吉祥が，元の至正 24 年（1364）に漢地に至った際にインドより突厥，屈支，高昌を通り，甘粛より漢地に入ったとする史料がある［「西天善世禅師塔銘」『蒲庵集』巻 6, 275 葉表］．しかし，モンゴルと明朝が抗争を行なっていた洪武・永楽期にこのルートが機能していたかどうかは確認できない．

が多い[田中・吉崎 1998: 31, 119]．ここからもネパールはインドの仏教文化圏に属しているといえる．

そして，ネパールの使節のルートについては『明太宗實錄』に以下のように記されている．

『明太宗實錄』巻 203, 永楽 16 年 (1418) 8 月戊寅の条
尼八剌國王沙的新葛，遣人貢方物．上遣中官鄧誠齎勅，往賜之錦綺，紗羅，與其貢使偕行．凡所經罕東，靈藏，必力工瓦，烏斯藏，野藍可般卜納等處頭目，皆有賜賚．
尼八剌國王沙的新葛，人を遣わし方物を貢す．上，中官・鄧誠をして勅を齎し，之に錦綺，紗羅を往賜し，其の貢使と偕行せしむ．凡そ經るところの罕東，靈藏，必力工瓦，烏斯藏，野藍可般卜納等處の頭目に，皆賜賚有らしむ．

ここにはネパールの使節が漢地に入る際に罕東 (Tib. har gdong)，靈藏 (Tib. gling tshang)，必力工瓦 (Tib. 'bri gung)，烏斯藏 (Tib. dbus gtsang) を通過したことが述べられている．ここで述べられている罕東は瞿曇寺の勢力圏だった[32]．それは『明太祖實錄』にある以下の記述から推測される．

『明太祖實錄』巻 225, 洪武 26 年 (1393) 2 月壬寅の条
西寧番僧三剌，貢馬．先是三剌爲書招降罕東諸部，又剏佛刹於碾白南川，以居其衆．至是始來朝，因請護持及寺額．上賜名曰瞿曇寺．
西寧番僧三剌，貢馬す．是より先，三剌，書を爲して罕東の諸部を招降し，また佛刹を碾白の南川に剏め，以て其衆を居す．是に至り始めて來朝し，因りて護持および寺額を請う．上，名を賜り，瞿曇寺といわしむ．

(32) 罕東は，洪武・永楽朝においては青海湖の周辺を指した [鄧 1982: 64]．

ここでは，瞿曇寺を創建した番僧三剌(三羅)が罕東の諸部族をまとめて寺院を創建し，明朝から瞿曇寺の寺名を下賜されたことが述べられている．ここから同寺が罕東に影響力があったことがわかる．このようにネパールの使節は瞿曇寺の勢力圏を通って帰国していたのである．

このように，「御製瞿曇寺碑」中の記述を他の史料を用いて検討した結果，瞿曇寺が明朝より東西の仏教文化圏の交流の重要な拠点としてみなされていたことが明らかとなった．

おわりに

本稿では，従来においては検討されなかった永楽帝の対外政策における瞿曇寺の位置づけを試みた．

第 1 章では，現地調査に基づく「御製金仏像碑」の移録と和訳を行った．第 2 章では，同碑に対して，先行研究では十分になされなかった史料的価値の検討を行ない，史料として信頼が置けることを証明した．第 3 章では，その内容を碑文の典拠となった優填王の造像伝説を手がかりに検討することによって，同碑は永楽帝の仏教功徳をインドに至るまでの西方の仏教文化圏に宣伝する内容であることを明らかにした．第 4 章では，「御製瞿曇寺碑」の内容を検討することによって，明初において瞿曇寺が東西の仏教文化圏の境界にあり，両者の交流の要地とみなされていたことを明らかにした．以上のことから，瞿曇寺は永楽帝の仏教功徳を西方の仏教文化圏に宣伝する拠点としての役割を果たしていたことがわかった．

永楽帝の対外政策においては国際関係の理念として華夷秩序が前面に出されたとする捉えかたがある[檀上 1997: 220-237]．また，明朝のチベット政策は，チベット人を「遠夷」として直接統治をせず，彼らを政治的に「懐柔」するために経済的援助を行なうという漢人王朝の伝統的な政策だったとする研究もある[沈 2007: 299-300]．

しかし，大乗仏教理念に基づいた衆生済度を願う皇帝像が，青海のチベット仏教寺院を通じて西方の仏教文化圏に示されたことが，本稿によって明らかにされた[33]．ここから，永楽帝によって，華夷秩序，懐柔遠夷といった儒教的理念のみならず，世界的な宗教思想である大乗仏教を取り入れた対外政策が行なわれたことと，青海のチベット仏教寺院が単に漢地とチベットのみではなく，より広くインド・ネパールを含む西方の仏教文化圏との結節点として位置づけられていたことがいえる．

参考文献

〔日文〕

稲本　泰生

1997「優填王像東伝考——中国初唐期を中心に——」『東方学報』69, pp. 357-457.

乙坂　智子

1991「明勅建弘化寺考——ある青海ゲルクパ寺院の位相——」『史峯』6, pp. 31-68.

1998『蛮夷の王，胡羯の僧——元・明代皇帝権力は朝鮮・チベットからの入朝者に何を託したか——』平成 8·9·10 年度科学研究費補助金報告書.

2002「旅するペルデンタシー——明代進貢西僧遊歴譚——」『中華世界の歴史的展開』汲古書院, pp. 267-287.

菅野　博史

2007「中国仏教初期の機と感応思想について——道生・僧亮を中心として——」『創価大学人文論集』19, pp. 33-51.

百済　康義

2004「『栴檀瑞像中国渡来記』のウイグル訳とチベット訳」『中央アジア出土文物論叢』朋友書店, pp. 71-83.

榊　亮三郎

1962『梵蔵漢和四訳対校翻訳名義大集』(第二刷)，鈴木学術財団.

佐藤　長

1986『中世チベット史研究』同朋舎.

(33)　その一例として，永楽帝によるチベット文，漢文大蔵経開版事業があげられる．この事業については，羽田野［1987］があり，最近の文献学的研究として Silk［1996］がある．

沈　衛榮
2003（岩尾一史 訳）「元，明代ドカムのリンツァン王族史考証――『明実録』チベット史料研究（1）――」『東洋史研究』61-4, pp. 76-114.
2007（片桐宏道 訳）「『懐柔遠夷』言説における明代中国とチベットの政治・文化関係」『中国東アジア外交交流史の研究』京都大学学術出版会, pp. 264-310.
高田　修
1967『仏像の起源』岩波書店.
1987『仏像の誕生』岩波書店.
田中　公明・吉崎　一美
1998『ネパール仏教』春秋社.
檀上　寛
1997『永楽帝――中華「世界システム」への夢――』講談社.
中村　元
2001『広説仏教語大辞典』上巻，東京書籍.
中村　元・久野　健（監修）
2002『仏教美術事典』東京書籍.
中村　元・福永　光司・田村　芳朗・今野　達・末木　文美士（編集）
2002『岩波仏教辞典』（第二版），岩波書店.
長谷部　幽蹊
1993『明清仏教教団史研究』同朋舎.
羽田野　伯猷
1987「永楽刻チベット蔵経おぼえ書き」『チベット・インド学集成2巻』法蔵館, pp. 327-356.
伴　真一朗
2005「アムド・チベット仏教寺院トツァン・ゴンパ（瞿曇寺）のチベット文碑文初考――永楽16年「皇帝勅諭碑」の史料的価値の検討を中心に――」『大谷大学大学院研究紀要』22, pp. 189-219.
平川　彰
1981「大乗の仏陀観と仏像の出現」『大乗仏教から密教へ――勝又俊教博士古稀記念論集――』春秋社, pp. 25-49.
福島　光哉
1970「智顗の感応論とその思想的背景」『大谷学報』49-4, pp. 36-49.
宮崎　市定
1992「洪武から永楽へ――初期明朝政権の性格――」『宮崎市定全集』13冊, 岩波書店, pp. 40-65.
山口　瑞鳳
1998『チベット語文語文法』春秋社.

横山　紘一・広沢　隆之
1997『仏教語辞典 ——瑜伽師地論に基づく梵蔵漢対照・蔵梵漢対照——』山喜房仏書林.

〔中文〕(ピンイン順)
才讓 (Tib. tshe ring)
2007「明宣宗與藏傳佛教關係考述」『中國藏學』2007-9, pp. 14-19, 100.
陳　慶英
2000「論明朝對藏傳佛教的管理」『中國藏學』2000-3, pp. 57-74.
陳　慶英・馬　林 (編)
1990「青海藏傳佛教寺院碑文集釋」(『中國西北文獻叢書』154 冊) 蘭州古籍書店.
鄧　鋭齡
1982「明初安定・阿端・曲先・罕東等衛雜考」『歴史地理』2, pp. 58-65.
1992「明朝初年出使西域僧人宗泐事跡補考」『歴史地理』10, pp. 228-238.
1994「明西天佛子大國師智光事迹考」『中國藏學』1994-3, pp. 34-43.
西藏自治區文物管理委員會
1981「明朝皇帝賜給西藏楚布寺葛瑪活佛的兩件詔書」『文物』1981-11, pp. 42-44.
謝　佐
1998『瞿曇寺』青海人民出版社.
謝　佐・格　桑本・袁　復堂
1993『青海金石錄』青海人民出版社.
張　怡蓀 (主編)
1985『藏漢大辭典』民族出版社.

〔欧文〕
Goldstein, M. (ed.)
2001 *The New Tibetan-English dictionary of modern tibetan*, University of California press, Berkeley / Los Angeles / London.
Enoki, K.
1998 "Tsung-lê's Mission to the Western Regions in 1378-1382" *Studia Asiatica, The Collected Papers in Western Languages of the Late Dr. Kazuo Enoki*, Kyuko-shoin, Tokyo, pp. 546-552. [First published in *Oriens Extremus*, 19:1, 1972, pp. 47-53.]
Franke, H.
1981 "Tibetans in Yüan China." *China under Mongol rule*, ed. by John D. Langlois, Jr., Princeton University Press, pp. 296-328
Jäschke, August H.
1985 *A Tibetan-English dictionary*, Rinsen Book, Kyoto. [First published 1881]

Otosaka, T.

1994 "A Study of Hong-hua-si Temple Regarding the Relationship between the dGe-lugs Pa and the Ming Dynasty." *Memoirs of the Research Department of the Toyo Bunko, Tokyo*, No. 52, pp. 69-101.

Petech, L.

1984 *Mediaeval history of Nepal (c. 750-1480)*, Istituto Italiano per il Medio ed Estremo Oriente, Roma.

Schram, Louis M. J.

1957 *The Monguors of the Kansu-Tibetan border; part 2: Their Religious Life*, American Philosophical Society, Philadelphia.

Silk, Jonathan A.

1996 "Notes on the History of the Yongle Kanjur." *Suhrllekhah: Festgabe für Helmut Eimer*, hrsg. von Michael Hahn, Jens-Uwe Hartmann und Roland Steiner, Indica-et-Tibetica 28, Verl., Swisttal-Odendorf, pp. 153-200.

Sperling, E.

1990a "Ming Ch'eng-tsu and the Monk Officials of Gling-tshang and Gon-gyo." *Reflections on Tibetan Culture: Essays in Memory of Turrell V. Wylie*, Edwin Mellen Press, Lewiston, pp. 75-90.

1990b "The Ho clan of Ho-chou: A Tibetan Family in Service to the Yüan and Ming Dynasties." *Indo-Sino-Tibetica: Studi in onore di Luciano Petech*, Bardi Editore, Roma, pp. 359-377.

1993 "Did the Early Ming Emperors Attempt to Implement a "Divid and Rule" Policy in Tibet?" *Contributions on Tibetan Language, History and Culture*, Wien, pp. 339-355.

Wylie, T.

1979 "Lama Tribute in the Ming Dynasty." *Tibetan studies in honour of Hugh Richardson: Proceedings of the International Seminar on Tibetan Studies, Oxford, 1979*, Oxford, pp. 335-340.

参考史料

『西藏歷史檔案薈粹』文物出版社, 1995.

順治『西寧志』(『中國西北文獻叢書』第 1 輯) 蘭州古籍書店, 1990.

『程雪樓文集』(『元代珍本文集彙刊』) 國立中央圖書館, 1970.

『大正新脩大藏經』16 冊, 大正新脩大藏經刊行會, 1964.

『蒲庵集』(『禪門逸書』初編 7 冊) 明文書局, 1980.

『寶藏』5 冊, 朝華出版社, 2000.

『明實錄』中央研究院歷史語言研究所, 1964-1966.

deb ther rgya mtsho: The Ocean Annals of Amdo, Śata-Pitaka Series: v. 226, New Delhi, 1977.